

演題 5

自閉症児における歯口清掃状況と電動歯ブラシの導入についての検討

○柿元協子、森主宜延、谷 齊子、上田泰弘、
田中千穂子、九万田貴子、福重雅美、
佐藤まゆみ、北野真理子、枝元雅代

鹿大・歯・小児歯

近年、在宅障害児の口腔保健状況は、歯科関係者ならびに障害児の保護者の歯科保健に対する関心の向上により、良好な状態に推移していることが示唆されている。

自閉症児については、以前より齲蝕罹患状況は一般健常児より良好であると報告されている。よって、歯科保健上問題となるのは、齲蝕に罹患した時の治療時の行動管理とか、予防学的に歯科保健上欠かせない、食事管理と歯口清掃の困難さといわれている。そこで歯口清掃をとりあげ、その実情と、最近一般的に使用されてきた電動歯ブラシに対する、自閉症児の受け入れについて検討したので報告する。

対象ならびに方法：

対象は、鹿児島市で長い歴史を持つ自閉症の療育活動である日曜学級に参加している児童で、自閉症と指摘されている児童60名、その他、発達遅滞が2名、不明の者2名、合計64名である。

調査方法は、アンケートと診査とに分かれ、診査は、保護者による日常の歯みがき、本人自身による歯みがき、そして電動歯ブラシによる保護者ならびに本人の歯みがき行動の診査、そして汚れ度の診査を行った。

結果：

1. 虫歯予防で保護者の最も注意していることは、歯みがき関連であった。
2. 歯みがき回数は、1日2回、朝晩が最多頻度を示した。
3. 使用している歯ブラシは多くが一般的歯ブラシで、電動歯ブラシは数%であった。
4. 歯みがきに対する保護者の姿勢は自閉症度が重度なほど熱心であるものの、実際の歯口清掃の状況は、軽度なものほど良好であった。
5. 保護者により電動歯ブラシについては、何とか磨かせるが95%以上を占め、導入に対して良好な可能性が示された。
6. 保護者により電動歯ブラシを使用した場合、清掃効果は一般的な歯ブラシより良好であった。

演題 6

福岡市の訪問歯科検診における障害児・者の歯科疾患実態調査（19歳以下と60歳以上）

○永尾伊都子 伊藤かがり 平塚正雄
武内哲二 塚本末廣

福岡歯科大学高齢・障害者歯科学講座

福岡市では障害を持つ人々の歯科疾患の予防、及び歯科医療の確保を図る目的で、平成4年8月～10月までの期間に一次調査を、平成4年11月～平成5年1月までの期間に訪問歯科検診による専門調査を実施した。

専門調査は一次調査の回答者のうち、専門調査に協力できると意思表示した人を調査の対象とした。一次調査において専門調査を希望したのは304人で回収率（達成率）は46.9%（151人）であった。専門調査は福岡市から依頼されて、我々が調査対象者を直接訪問し、検診・調査に当たった。

そこで、今回我々は訪問歯科検診による専門調査結果から、19歳以下と60歳以上の障害児・者を比較検討したところ興味ある知見を得たので報告する。

(1)19歳以下は19人（男11人、女8人）、60歳以上は49人（男34人、女15人）であった。

(2)年齢区分を19歳以下と60歳以上のグループに別けて、各調査項目とのクロス集計を行ったところ、「発語状況」、「知的障害」、「歯みがきの介助」、「歯みがき剤の使用」、「ブラッシング指導の有無」、「うがい」、「常用薬」、「内科的疾患」、「義歯の経験」「カリオスタット」において0.1%以下の危険率で有意差が認められた。

本調査の結果をもとに、障害児・者本人、あるいは障害児・者をとりまく人達に対して各年齢層にあった歯科的アプローチを検討すると同時に、これからの障害者歯科医療を考えていくうえでの参考資料としたい。